

飲もう！ 大吟醸原料 威信懸け栽培



攻めの農業特等で勢い

協議会は2014年設立した。現在は生産者87人が加入。目標収穫量には1万俵(1俵60kg)を掲げ、全国各地で栽培研究に取り組む。こうした取り組みの成果が認められ、15年度の

長岡市で3年間の総評と栽培ポイントを話し合った。

同協議会は昨年12月に、日本酒の海外輸出は順調。「日本酒に最適の原料を安定供給するのが、新潟県の栽培情報を交換した。

「山田錦」は草丈が高く、らしさ攻めの農業だ」と生産者の鼻息は荒い。



大吟醸酒に適した酒造好適米「山田錦」は、西日本が主産地で、従来は新潟県での栽培が難しいとされた品種だ。同県山田錦協議会は、栽培3年目で、冷涼な気候に合った技術を確立。作付面積も設立当初の40haから、3倍の120haまで伸ばした。

「米どころの新潟で栽培することに意義がある」と、威信を懸けた取り組みが続いている。

16年産の生産量は744俵で、1等米以上の比率は77%を確保した。中でも、生産者2人が計180俵で特等として出荷することができた。全量が契約栽培で、海外輸出に積極的な山口県の酒造メーカーに供給する。「販売価格が魅力」だと説明する。

岩瀬忠男会長は、「新潟に適した栽培技術が、徐々に見えてきた。特等米が出たことは、今後の安定生産の励みになる」と喜んでいた。

「フードアクション・ニッポンアワード」で優秀賞を獲得した。

16年産の生産量は744俵で、1等米以上の比率は77%を確保した。中でも、生産者2人が計180俵で特等として出荷することができた。全量が契約栽培で、海外輸出に積極的な山口県の酒造メーカーに供給する。「販売価格が魅力」だと説明する。

岩瀬忠男会長は、「新潟に適した栽培技術が、徐々に見えてきた。特等米が出たことは、今後の安定生産の励みになる」と喜んでいた。

特等米で生産意欲を高める新潟県山田錦協議会

